

Center News

Center for Educational Research and Practice
Faculty of Human Development, University of Toyama

第29号

(2013年3月25日発行)



情報モラル講演会・12月

センターニュース29号 目次

02	巻頭言	スリランカに旅して	学部長	北村 潔和
03	挨拶	着任の挨拶	センター准教授	長谷川春生
04	寄稿	頑張れ「学びのアシスト」、メール報告を通して共に学ぶ	客員教授	本多 信昭
05	寄稿	「いじめ対応」の課題	客員教授	寺西 康雄
06	学園通信	幼稚園 小学校		
07	学園通信	中学校 特別支援学校		
08	報告	平成24年度スクールカウンセラー研究会		
09	報告	第17回発達と臨床の心理学講座		
10	報告	教育フォーラム2013「わかりやすい授業づくりのためのデジタル教科書活用」		
11	報告	情報モラル講演会		
12	報告	教育臨床部門 内地留学研修		
13	報告	子どもとのふれあい体験		
14	報告	国立大学教育実践研究関連センター協議会報告等		
15	業務報告	センター日誌		
16	編集後記			

人間発達科学部 学部長 北村 潔和

昨年12月の大学に在籍する息が詰まるような気分になった。休暇は取れるかと確認したら、学部長不在でも大丈夫ということで、ジャカルタに住んでいる娘に相談した。スリランカに行こうかとの話が来た。娘はジャカルタで仕事をしているのだが、ジャカルタに来てあまり観光ができないからとの話であった。それで、スリランカに旅してきた。氷点下の富山から気温27度近くの国へ出かけた。クリスマスの時期と重なったためか、成田からスリランカへの直行便は満席で、シンガポールを経由して、そこからスリランカの首都であるコロンボへ行くことになった。飛行時間は11時間を越えたように記憶している。

私が中学で地理を習っていた頃には、国の名称はセイロンでありイギリス領であったと記憶している。それがイギリスから独立しスリランカとなった。何処に位置するのかも調べないままに飛行機に乗り込んだ。スリランカに着いて地図を見ると、インドのすぐ下にある北海道ほどの小さな島が、スリランカであった。知られているのは、紅茶の産地であることぐらいだ。

興味は、発展途上国とはどのようなものか、生活はどのように営まれているのか、その中で子どもの教育はどのようになされているのかであった。夜の9時頃にコロンボ空港に着くと迎えが来ていて、その車に乗って今日の宿に。宿といっても、娘のボーイフレンドの家で、空港から車で30分ほどの少し裕福な人々が生活する地域にあった。敷地に入るには、ゲートがあり管理者が誰かを確認してゲートを上げて入れる仕組みになっている。そこから一歩外に出ると、トタン屋根の家が立ち並び、貧富の差があることは容易に見て取れる。1日目は、首都であるコロンボでの買い物だ。買い物といっても、氷点下から夏の国に入ったから、そこで着られる半袖のシャツを買うことにした。家の管理人が、運転手になり街を案内してくれることになった。街中の市民が利用するスーパーマーケットに入った。さすがに首都のスーパーマーケットで、日本と変わらない品揃えであった。現地では着ることができないような色の半袖のシャツを買った。

現地へ行き、風を感じると、貧富の差はどんなところにあるのか、何が問題になっているかがおぼろげに見えてくる。紅茶を生産している山に入ったときに、花売りの少年や茶を摘んでいる人と手振り身振りで話をした。花売りの少年の場合は、私ら日本人（娘、私、家内）は、何かやりきれない気持ちになり、買ってあげようと提案して車を止めさせた。しかし、ボーイフレンドはなかなか買わずに少年と話をしていた。結果的には少しまけさせて、花を買った。後で、ボーイフレンドは、花を買うことは簡単だが、少年がこの花売りが商売として成り立つと考えると、勉強しなくなるとボソッと言った。全員がこのことについては、話せなくなった。

また、茶を摘んでいる人たちにはIDが無い、との話になった。この国に住んでいても、実態が無いことになる。教育も受けられず、自分が誰かともわからないままここで黙々と働いている。この人たちの対応に少し変化ができてそうな話があると聞いて、少しほっとした。本人たちは、これが普通と思っているのか、明るい顔をして働いていたし、話しかけてきた。コーヒー豆の皮が甘いことも教えてくれた。

通りがかりのヒンズー教の寺院を見学した際、裏に廻るとプレスクールとの看板が目に入った。幼稚園だろうと入り口から覗いていると、先生と思しき人が出てきて、入って見ていけとのことであった。すぐに園長先生が出てきて、色々話が聞けた。今はクリスマス休みで1月からまた始まると。150人の子どもがここで勉強している。また、外国からの訪問者は、はじめてであると。授業で使われている資料等も見せてくれた。しかし、ここに来られる子どもは、裕福な子どもとのことであった。このまま、立ち去るのも気が引けていくらかの寄付をして、記念写真を撮った。後で送ってくれとのことであった。国づくりの基礎は、教育であるのかと考えさせられた。悩むことなく、自分が置かれている環境がいかに幸せなことかと感じられた。

貧富の差は、教育に影響を及ぼすとの議論が日本で行われているとの話を聞いていた。しかし、この話は大学に進学できることを話題にしていたように理解している。スリランカにいて、何処の国に、誰の子どもとして生まれるかによって、自分の一生が決まっていくことが実感できた。少なくとも、食事ができることや教育を受けることに貧富の差の無い環境作りも必要かと考えさせられた。娘とそのボーイフレンドは、発展途上国への支援プロジェクトの仕事をしている。しかし、そこで行われている支援が国に根付くようになるのか疑問だと話していた。少なくとも、本センターは、少し手を差し伸べれば変わることができる人たちがいれば、そこに何らかの手助けができる場であってほしいと思っている。

挨拶

着任の挨拶ーよろしくお願ひいたしますー

センター准教授 長谷川 春生

本年度4月よりお世話になっております。センターでは学習環境研究部門を担当しております。

本センターの学習環境研究部門の活動内容は次の6つです。

- ・附属学校園と大学との教育研究に関する協力連携プロジェクトの推進
- ・学校教育カリキュラムと学習環境に関する調査、開発研究、研修
- ・教育実習カリキュラムの開発など、教師の力量形成についての実践的な研究
- ・県教委との連携による教員養成機能の充実
- ・教育実習の事前・事後指導に関するカリキュラムの研究と開発
- ・新しい学習内容や授業方法、学習スキル等の研究と紹介

これらの活動により、附属学校園や教育委員会との連携をより深めながら、教員を目指す学生のサポートや、小中学校等における学習の充実に役立てるように努力したいと考えております。

本センター着任までは、新潟県公立学校教員として小中学校に24年間勤務しておりました。そこでの経験を生かしながら、研究や業務を進めていけたらと考えております。小中学校等での授業実践の蓄積と、教育方法学等における研究成果の両方を大切に、それらを小中学校等と大学が共有しさらに研究や業務を進めることが重要と考えております。そのことにより、子どもたちにとってよりよい学習環境を作り、よりよい学習が進められるようになるのではないかと思います。

人間発達科学部では教員を目指す学生のために、学級担任論、子どもとのふれあい体験という2つの授業があり、主に1年生が取り組みます。学級担任論は富山県教委と連携し、県内の小学校で学級担任の補助をしながら授業や学級経営について具体的に学んだり、子どもの視点に立った支援を行ったりします。子どもとのふれあい体験では、子どもを対象とした事業にボランティアとして参加し、子どもについての理解を深めます。教育実習前にこのような授業を受けられることは学生にとって非常に大きなメリットだと思います。これらのコーディネートには当部門も大きくかかわっています。

小中学校等の先生方への支援として、本年度、本部門では情報モラル講演会を開催しました。子どもたちのケータイやインターネットの使用にかかわるトラブルは多く、学校においても保護者と協力しながら適切な指導を行う必要があります。今回の講演会ではそのポイントを講演していただきましたが、これからもセンターとしてのサポートが必要と考えております。

教員を目指す学生へのサポート、小中学校等の先生方へのサポート等、6つの活動内容について、少しでもお役に立てるように精一杯がんばります。皆様からのご指導をよろしくお願ひいたします。

寄稿

頑張れ「学びのアシスト」、 メール報告を通して共に学ぶ

センター客員教授 本多 信昭

学びのアシストとは、原則毎水曜日、小学校で学級担任支援活動をしながらか教育実践を学ぶ学級担任論受講者の愛称である。本年度は、より主体的な活動を目指して次の目標を提示した。

「その日の活動で一番印象に残ったこと（感動）を探し、それについて考えたことを報告しよう。」

事例は学びのアシスト Y 君とのメール交換の様子である。共に学ぶ姿を紹介する。

11月21日 学びのアシスト報告11： 〈主体性が感じられない事例〉

音楽： 鍵盤ハーモニカを弾けない子は五本指を鍵盤につけられず、1つの指に集中すると他の四本の指は離れてしまい次に音が鳴らせません。微細運動は苦手なのかな。苦手意識を持つとやる気も自信も削がれるので大人が上手に働きかけて、苦手意識を克服させることが大切だと思いました。

学びのアシスト Y 先生へ （担当本多のコメント返信）

上手に弾けない子の観察がしっかりしています。大人が上手に働きかけるという対策も浮かんでいます。で、Y先生は何をするのですか。Y君も子どもたちの先生(大人)でしょう。他人任せの言葉だけでは世の中は何も変わりませんよ。

12月5日 学びのアシスト報告13： 〈積極的な活動姿勢が見られる事例〉

長休み「足し算・引き算名人のタイム計測」： 水曜日毎の記録の伸びから、毎日努力しているのだなと思います。自分自身にも気合いが入るし、もっとこの子達のためにスキルを身に付けたいと思えます。

学びのアシスト Y 先生へ （担当本多のコメント返信）

Y先生の発案ですか、素晴らしい。子どもたちはゲーム感覚が大好きです。誰でも頑張れば記録は伸びます。トップ争いの他、自分の記録がどれだけ伸びたか、自分への挑戦を競わせることもできます。工夫によって子どもたちは自主的に頑張ります。参考になる報告でした。ありがとう。

12月12日 学びのアシスト報告14： 〈教師の卵としての無力感事例〉

今日は雪が降って子どもたちはソワソワ。授業中にもよそ見やおしゃべりが多かったので、注意しましたが僕の言うことは伝わらず、担任の先生の怒り口調でやっと静まります。……

学びのアシスト Y 先生へ （担当本多のコメント返信）

外界の楽しい刺激に興味をもつのは幼児も小学生も同じです。どうしても外で雪にふれたいのです。休み時間に外で遊ぶと満足します。もちろんY先生が先頭です。授業中のよそ見やおしゃべりへの対応は、大もとの原因を除かなくては無駄な注意に終わります。つまらぬことで、実習生と先生の違いを悲観的にとらえないでください。子どもの心理を読むベテランの先生は叱りませんよ。

12月19日 学びのアシスト報告15： 〈素晴らしいと感じた学校行事の事例〉

2年生が1年生を対象に行ったおもちゃカーニバルという授業を観察しました。……

学びのアシスト Y 先生へ （担当本多のコメント返信）

この企画は、1年生に楽しいと感じてもらえなければ、先輩としてのプライドが壊れます。2年生は効果的に遊ばせるための会場作りや遊び方の説明など、目一杯頑張ります。ここがねらいです。遊んだ1年生は、自分たちも作りたい、あんな風にやってみたいと考えるでしょう。

このような活動が学校の伝統作りにつながっていくのです。大切なのは先輩としてのプライド、これは向上心の元になります。良い学びをしました。私も報告を読んで勉強できました。ありがとう。

◎ 学びのアシストの具体事例を元にした報告へのコメントを書きながら思ったこと

- ・具体的な事実への感動の報告である。読み手を大切に、共に感動する姿勢で返信作成。
- ・「私も良い学びをしました。ありがとう。」と締めくくるコメントをめざす姿勢。

指導する姿勢より一人ひとりを大切に感動の中に喜びを探す姿勢を学んだ1年間だった。

センター客員教授 寺西 康雄

今年度、本県の「いじめ対応」に関する37の事例に目を通す機会があった。どの事例からも真剣に取り組んでいる学校の姿勢が伺えた。その努力を十分に認めた上で、「いじめ対応」の課題について考察したい。

○ 個別的対応と集団的対応の両面からのアプローチ

事例の1つ1つを「対応の形態」について考察した結果、「個別的対応」だけで終わっていると考えられる事例が全体の90%余りを占めた。

いじめは「加害者」と「被害者」の二者関係にとどまらない。「観衆」がはやし立てたり、「傍観者」が見て見ぬふりをしたりすることによって、いじめは増幅される。「観衆」と「傍観者」が否定的な反応を示すことで、「加害者」は集団から浮き上がり、結果的にいじめへの抑止力になる。「加害者」や「被害者」への指導だけでなく、「観衆」と「傍観者」への指導が大変重要である。

今後は、当事者同士の人間関係の修復などの「個別的対応」と併せて、当事者を含む学級や学年への「集団的対応」の両面からのアプローチが不可欠である。

○ 攻めの姿勢

「指導の在り方」について考察した結果、事例の大部分が「守りの姿勢」に終始していた。

例えば、いじめ問題が表面化すると、事実確認をしたうえで加害者の子どもによる被害者の子どもへの謝罪で一件落着とする対応。あるいは、学年集会や全校集会で教師からの「お説教」や「いじめゼロ宣言」などの「訴えかけ」を行い、その後で作文を書かせて終わる対応等。いずれも、「後追いの取り組み」であり、「守りの姿勢」である。

根っこを絶たない以上、いじめは繰り返し、形を変えて際限なく生まれてくる。子どもたちがなぜいじめをするのか、あるいは、なぜ付和雷同的にいじめに参加していくのかなど、「いじめの根っこ部分」にまで踏み込み、打って出るという「攻めの姿勢」が、今後、求められる。

○ スクールカウンセラー（SC）の活用

「SCの活用」について考察した結果、「いじめ問題」へのSCの出番が少ないことが分かった。37の事例の内、SCとの連携により「いじめ問題」が解決できた事例は20%弱であった。

「学校はSCとの連携が大切である」と言われておりながら、「いじめ問題」に関しては、まだ不十分である。たとえSCに出番が回ってきたとしても、その大部分が「被害者の子どもの心のケア」や「保護者に対する相談」である。「いじめ問題」が社会問題となっている昨今、SCは「教職員に対する相談（コンサルテーション）」をはじめいろんな役割を幅広く担っていく必要がある。そのためには、学校はSCと常に密接に情報交換できる信頼関係づくりに努めなければならない。

学園通信

附属幼稚園から

附属幼稚園 舟林 美乃

今年度は、「豊かな心をはぐくむ～子どもにとっての環境をとらえ直す～」を研究主題に掲げ、実践研究を進めてきました。昨年度の研究では、目の前の子どもがさらに没頭して遊ぶようにするにはどうすべきかについて、瞬時に判断して援助することを積み重ねることがいかに大切であるか、そして難しいことであるかを実感することができました。このような成果と課題を踏まえ、当初3か年計画であった本研究の計画を、5か年計画に修正して研究を進めていくことにしました。子どもの内面の高まりを意図的に支えることは保育者にしかできないことであり、子どもの身の回りの環境のすべてが子どもの内面の高まりに影響を与えるという、環境の重要性を深く認識し、さらなる研究の必要性を感じたからです。

今年度も、大学の先生方に各クラスにお一人ずつ専属でついていただき、研究保育の助言はもちろん、日常の事例研究についても専門的なご意見をいただくなど、年間を通してご指導いただきました。

そのような研究の歩みの中で、6月19日(火)に聖徳大学児童学科 教授 篠原孝子先生を講師にお迎えし、保育フォーラムを開催しました。県内外から250名余りの参会を得、子どもの姿をもとに内面の読み取りについて多面的に見ることの大切さを学びました。

次年度は「豊かな心をはぐくむ」を主題に掲げての5年次研究のまとめの年度となります。4年間の研究の積み重ねを踏まえ、さらに保育実践力を高めていきたいと考えています。

附属小学校から

南極兄弟

附属小学校 澤柿 教淳

地球に残された最後の秘境、南極。その氷の大地で今、私は南極観測隊に同行しながら計り知れない南極の魅力を感じています。～同行日記「南極兄弟」より抜粋（web「南極兄弟」で検索）～2012年12月29日(土曜日) 外出注意令（vol.69）

南極昭和気象台の予報が的中。瞬間最大風速は35mを超えている。強風の到来は歓迎できないが、それを2～3日前から予報し、見事的中させる気象チームはさすが。彼らによれば、強風のピークはまだ先のように、今日の真夜中よりもっとも警戒が必要な時間帯だという。

早速、越冬隊長の指揮のもと、朝の人員点呼、集団での移動、各作業へのKY（危険予知）の強化などが指示された。一方、各隊員はそれを緊張感と切実感をもって受け止め、責任ある行動に努めた。もっとも、窓の外の様子を見ただけで、これが普通でないことはすぐにわかった。自然に逆らってはならないのだ。越冬経験者によれば、冬のブリザードの場合はこの強風に加え、低温、積雪、視界の悪さも加わって、たいへんなことになるという。

今も窓の外から、ゴーゴー、ピューピューという音が聞こえる。それはまるで、氷の大陸を這いつくばうように流れてきた地球の息づかい。この音が、私が体験した2つ目の「南極の音」となった。

（1つ目の「南極の音」はアーカイブス12月15日（vol.55）を参照）



附属中学校から

附属中学校 堀内 和直

附属中学校では「主体性の高まりをめざす課題学習」を研究主題に掲げ、昨年度から「言語活動の明確化と充実」を副題として教育研究活動に取り組んでいます。

6月の教育研究協議会では、国語、数学、英語、音楽、美術が研究発表と公開授業を、社会、理科、保健体育、技術・家庭が公開授業を行いました。全教科での開催となったこともあり、多数のご参加をいただき、大変充実した研究協議会となりました。

校内研修では、副題1年目であった昨年度の研修を踏まえ、「話し合い」などの言語活動が、教科のねらいに迫る効果的なものになるにはどうすればよいのかについて研究するとともに、本校の全教員が参観し協議する（教科）代表者授業などを通して、他教科の教員との意見交換を積極的に行い、全体で共有しました。全体研修会では映像資料や写真資料を活用して生徒の具体的な姿で検証していききました。その結果、各教科における言語活動について明確になったことを全体で共有するとともに、今後の全体での方向性について確認することができました。

また、夏季研修会では、生徒にとっての言語活動の有効性と言語活動を取り入れるときの留意点について、実感を伴って共通理解を図るために、教師自身が生徒の立場になって言語活動を体験する研修を行いました。

今後は、これまでの明確化の成果を踏まえ、充実に焦点を絞って研究を進めていきたいと思っています。

特別支援学校から

附属特別支援学校 書川 隆行

特別支援学校では、研究主題を「児童生徒が地域社会で主体的に活動するための支援はどうあるべきか～キャリア発達を育む授業づくり～」と設定して2か年計画で取り組みました。今年度が、最終年次（2年次）です。

本研究の仮説は、『参加』を高める授業づくりを行うことで、キャリア発達が育まれ、児童生徒が主体的に活動する姿を実現することができるのではないかです。

この2年間で、キャリア発達が育まれ、児童生徒が主体的に活動する姿を実現するためには、支援ツール、支援環境の工夫、支援者間の連携、学習プロセスを土台として、『参加』を高める四つの力』を獲得し、伸ばすことが大切であることが明らかになりました。

具体的には、今までも授業づくりの中で行ってきた成果に加えて、児童生徒の「夢や希望」を大切にするための「活動の意味付け・価値付け」、習得した知識技能を実際の場面で発揮する前向きな取組、「働く・暮らす・遊ぶ」ことの質を上げるために重要な達成感を味わわせること、社会の中で暮らしていくために不可欠であるその場にふさわしい振る舞いなどを授業の中で意識的に取り込むことが重要であることが分かりました。

この研究主題は、学校教育の恒久的な課題であり、今後も追究されるべき課題を多く含んでいます。本校がこれまで解明してきた内容に、キャリア発達を育む授業づくりを積み上げて、児童生徒の「夢や希望の実現」のために、今後さらに検討していきたいと思っています。

本研究を進めるにあたっては、学部の川崎先生、阿部先生、水内先生に貴重な助言をいただき、研究を深めることができました。心よりお礼を申し上げます。



<中学部の「女子会」(余暇活動) より>

報 告

平成24年度スクールカウンセラー研究会

センター准教授 石津 憲一郎

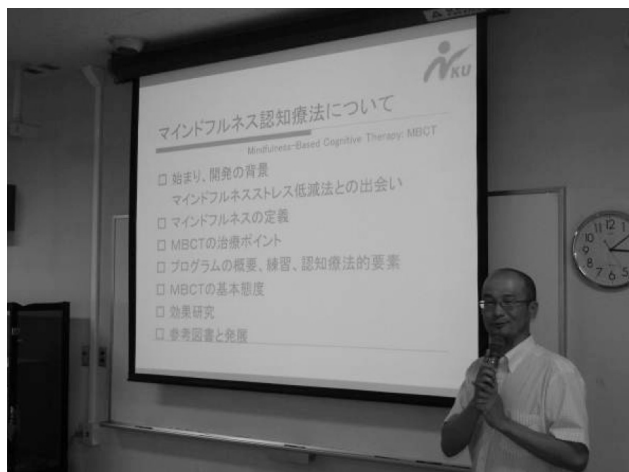
アーロン・ベックによって認知療法が提唱されてから、抑うつ維持要因としての「認知」の影響については、膨大な数の研究が行われてきた。Randomized Controlled Trial (RCT) による研究結果の蓄積は、メタ分析によって集約され、認知行動療法は、鬱に対して抗うつ薬と同程度の作用をもつとされる。一方、近年では、マインドフルネスという考えに基づく、新しい認知行動療法が発展している。

今年度の研究会ではマインドフルネス認知療法の専門家である、家接哲次先生をお招きし、「マインドフルネス認知療法入門」に関する講演をしていただいた。

平成24年8月25日

講師 名古屋経済大学短期大学部 准教授 家接 哲次 先生

演題「心理療法の最先端—マインドフルネス認知療法入門—」



当日は、心のモードに関するワークを取り入れた講演を行っていただいた。また、非常に多くの参加者から講演内容への意見や質問があり、参加者の関心の高さがうかがえた。この講演会の数か月後には、マインドフルネスの概念を心理の世界に取り入れたカバッドジン博士が来日するなど、マインドフルネスに基づく心理療法は、今大きな注目を集めている。クライアントが自分の気づきを深めるために、どのようなことに注目して援助すればよいのかを、改めて考えることができるとても有意義な研修だった。

報 告

第17回発達と臨床の心理学講座

センター准教授 石津 憲一郎

子どもの困難や問題行動があった場合であっても、私たちは必ずしも子どもだけと関わるわけではありません。場合によっては保護者のどちらかとは関わることができないこともあります。家族療法では、「対人援助は、必ずしも IP (identified patient: 患者と見なされた人、家族を代表して問題を呈している人) を必要としない」と言われ、家族の力動をきちんと見立てていくことが大切になります。

保護者を通じた支援、また保護者のための支援は、非常に大切ですが、その支援をどのようなポイントで行っていけばよいのかは、私たちにとってとても難しい問題でもあります。そこで、今年度の発達と臨床の心理学講座では、そうした家族支援や家族援助に焦点を当て、以下の講座を開催しました。

平成25年 2 月 16 日 (土)

安田女子大学心理学部心理学科
准教授 奥野 雅子 先生

『保護者との出会い方

— 子どもを支援するために家族とどう関わるか —



当日は、現場の先生方と、本学の学生を含め、およそ40名がこの講演会に参加しました。

講演では、実際の事例を基に、どのような援助がおこなわれるのかについてたくさんの重要なお話を頂きました。最後は、フロアから多くの質問が出るなど、大変有意義な講演だったという感想が、多くの参加者から聞かれました。奥野先生、子どもの適応を援助するための貴重なお話をありがとうございました。

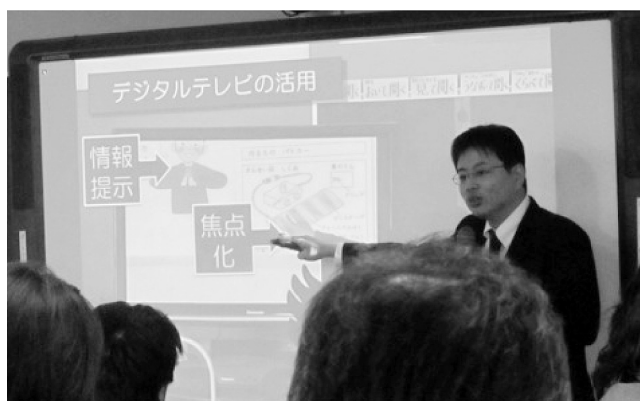
報 告

教育フォーラム 2013「わかりやすい授業 づくりのためのデジタル教科書活用」

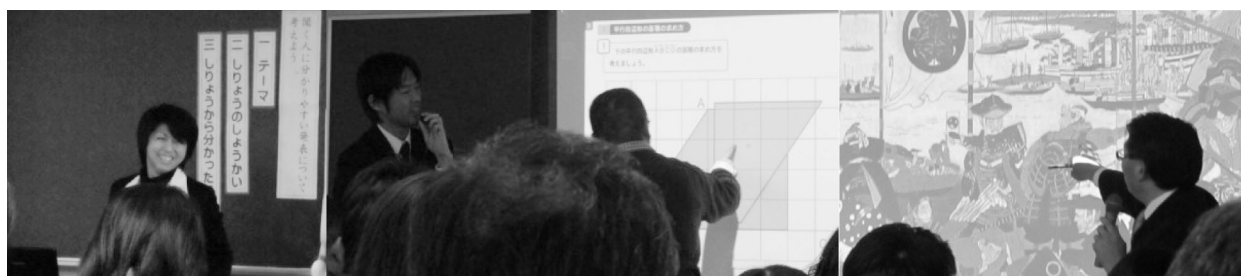
センター長 小川 亮

平成25年2月11日（月）の建国記念の日に教育工学研究部門と富山県教育工学研究会の主催による教育フォーラム2013が開催されました。会場は人間発達科学部141教室。参加者は105名でした。

前半は、高橋純准教授がコーディネータを務めるシンポジウム「デジタル教科書の効果と課題」。富山県内でデジタル教科書の活用を実践している3名の先生に模擬授業をしてもらいました。追分香織先生（富山市立奥田小学校）には国語科の、山崎貴志先生（富山市立速星小学校）には算数科の、宮崎靖（砺波市立砺波東部小学校）には社会科の模擬授業をしていただきました。先生方には、模擬授業のあとコーディネータとの一問一答の形で、授業のねらいとデジタル教科書活用のポイントを話してもらいました。



高橋准教授が情報をまとめていく

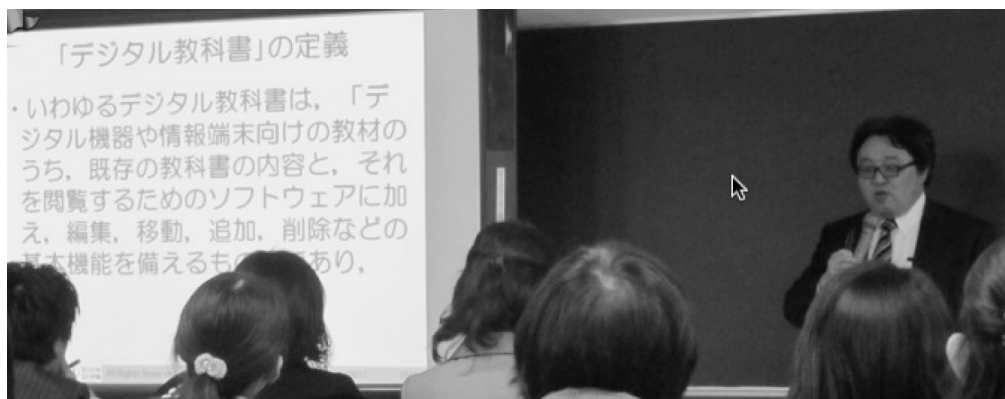


追分先生の模擬授業（国語）

山崎先生の模擬授業（算数）

宮崎先生の模擬授業（社会）

後半は玉川大学教職大学院教授の堀田龍也先生による、特別講演「デジタル教科書の開発・実践動向と今後の期待」でした。堀田先生の講演では、確かな学力が求められている学校教育の現状（新しい学習指導要領ならびにカリキュラム）をいかに効果的に乗り切り、その学びの上になって子どもたちの考える力を育てる活動を押し進めるかについての工夫が重要であると語っていただきました。



堀田先生の特別講演

「予防教育、未病教育、事後指導・再発防止教育」の三層構造を 持たせた情報モラル教育

ー情報化する子どもの生活空間とそれへの学校の対応ー

センター准教授 長谷川 春生

ケータイやインターネットにかかわる子どもたちのトラブルや事件が後を絶ちません。ネットいじめやネット依存など、今までにない新しい問題も起こっています。ケータイやインターネットの正しい使い方を子どもたちにどう指導すればよいのかをテーマに、12月1日（土）に講演会を開催しました。

講師は、情報モラル指導の第一人者である金城学院大学国際情報学部教授長谷川元洋先生にお願いしました。

当日は、情報モラル教育に関心のある小中学校の先生方と本学部学生、合わせて30名の参加がありました。長谷川元洋先生の分かりやすく、しかも内容の濃いお話と、意欲的な参加者の皆様のお陰で、充実したすばらしい講演会となりました。

まず、参加者の皆様からグループで話し合いをしていただき、そこで話し合われたネットワーク利用にかかわる現状・課題・問題点等について全体で発表し合いました。講師の長谷川元洋先生からは、その一つ一つについて、最新の動向等を加えながら、どのような指導が必要であるかについて、詳しくお話をしていただきました。

子どもたちにネットワークにかかわる正しい知識を身に付けさせないと、子どもたちが被害者になるだけでなく、加害者にもなってしまいうこと。一見、個人情報ではないような情報も、それらをたくさん集めると個人が特定されてしまうこともあること。ID とパスワードを子どもたちに分かりやすく教えるには、ID は家の表札、パスワードは家の鍵というような例えが分かりやすいことなど、子どもたちに指導すべき内容や方法を分かりやすくお教えいただきました。

長谷川元洋先生、そして、参加者の皆様、本当にありがとうございました。



小グループごとのネットワーク利用にかかわる問題点等についての話し合い

報 告

教育臨床部門 内地留学生座談会 ～3 カ月を振り返って～

参加者：細川靖子（H）、中村吉男（Y）、加埜優子（K）
岡部明子（O）、角丸映至（E）

E：研修を終わられる方と残り3カ月の方もいますが、3カ月を振り返っていかがでしたか？Y：若いころも勉強したんだろうけど、忘れていて、そうだったのかという発見がたくさんあったな。O：現場で経験してきたことと、ここで学んでいることが結び付いた感じはあるかな。Y：学生のときはわからなかったし、必要感がなかったからね。経験をもとに話を聞けるから頭の中で結び付くんだよね。O：大学の勉強ってこんなに面白かったんだって思ったな。K：90分も長く感じなかったですよ。O：あとは、いろんな校種の先生方と一緒に過ごしていい経験になったな。中高の話も聞けて視野が広がった。K：私は学校では部活動をやっている先生って見られるけど、ここではそれを置いて皆さんに見ていただいたので新鮮でした。楽しかったです。H：私は今しか出来ないこと、本読むとか、できてよかったかな。勉強する中で今までやってきたことを振り返ることができた気がするな。あとは、授業でいろんな発表とかやって、自分ってこんな人間だったんだってなんか再発見できた。E：みなさん学校現場に戻るとこれまでの指導と変わりそうですか。H：変えたいとは思いますが。O：変わるのかなって思うけど、1週間くらいで前と同じようになっている気がするな。でもどこかにここで学んだことは残っていて、それが財産なんじゃない。Y：今までの見方は一つの見方だけだったけど、今ならいろんな角度から見るできるようになっているんじゃない。それでOKでしょ。同じことをやっても意味はきっと違うと思うよ。K：たくさん勉強してきたから、報告書にまとめるの大変そうじゃないですか。E：あと3カ月も勉強できますしね。うらやましいですよ。この後、現場に戻っても今まで以上に頑張っていきたいと思いますね。みなさんどうもお世話になりました。



教育臨床部門の内地留学生として

塩原 こずえ

3カ月の研修は、短い時間ではありましたが、振り返ってみるととても内容の濃い、充実した時間でした。大学に来る前は、講義の内容についていけるのか、90分という講義を受けるだけの集中力があるのだろうかなど、いろいろな不安もありました。しかし、講義はどれもとても興味深いものばかりで、90分という時間があっという間に過ぎていきました。その中で、今まで漠然と感じていたものについて、「あれは、そうだったのか」と理解できた場面が多くありました。そして、そう感じられることはとてもうれしい経験でした。このような感じ方は、自分の今までの経験があったからこそその感じ方であり、大学生だった頃では感じられなかったものだと思います。そう考えると、同じことについて勉強しても、それぞれの年代や経験などによっていろいろな感じ方、学び方があるのだと思います。そして、それ故に、学び続けることは大切であり面白いのではないかと改めて気付きました。

心理学については勉強したこともなくゼロからのスタートでしたが、センターの先生方には、いつも温かく見守っていただくとともに、導いていただきました。また、テーマを決めて研究を進めていく中で、どこに進んでいけばよいのか分からず迷いそうになるたびに、先生方の的確な助言と温かい言葉に励まされました。そして、その中で教師としての姿勢というものについても、改めて学ばせていただきました。3カ月間本当にお世話になり、ありがとうございました。

報 告

子どもとのふれあい体験

センター准教授 長谷川 春生

「子どもとのふれあい体験」は、子どもを対象とした事業にボランティアとして参加し、各コースの活動を通して子どもとふれあい、子どもについての理解を深め、教師としての基礎的資質を向上させることを目的とした授業です。本センターの教員が全体のコーディネートを行い、コースごとに様々な活動を展開するものです。本年度開講のコース・サブコースは次のとおりです。

1. となみの100旅コース【担当教員：松本謙一先生】

2. 野外活動コース

- (1) Aコース【担当教員：広瀬信先生】
- (2) Bコース【担当教員：広瀬信先生・佐伯聡史先生】
- (3) Cコース【担当教員：堀田朋基先生・松本謙一先生】

3. 発達の気になる子どもの援助コース

- (1) 小学部【担当教員：小林真先生】
- (2) 中高部【担当教員：阿部美穂子先生・高橋満彦先生】
- (3) 青年部【担当教員：水内豊和先生】
- (4) 学習支援～寺子屋～【担当教員：川崎聡大先生】



体験交流発表会の様子

4. 遊び援助コース【担当教員：小林真先生・若山育代先生・西館有沙先生】

- (1) 東部児童館
- (2) バンデッドクラブ
- (3) キッズクラブ
- (4) ランチョンクラブ

5. 不登校児童生徒の援助コース【担当教員：石津憲一郎先生・下田芳幸先生】

6. ものづくりワークショップコース【担当教員：隅敦先生・成行泰裕先生】

1年間の活動の成果を互いに発表し合い、そこでの経験を共有するために、体験交流発表会を2月20日（水）に開催しました。どのコース・サブコースも活動の様子と学んだことについて分かりやすく発表し、互いの学びを十分に共有することができました。また、発表会に向けて、聞き手に分かりやすく伝えるための方法や内容を工夫したり、リハーサルをしたりする中で、表現力も高めることができました。各コースでお世話になった機関や施設の方からもお越しいただき、直接お話をさせていただくことができ、そのことによりさらに学びを深めることもできました。

報 告

第81回国立大学教育実践研究関連センター協議会

センター長 小川 亮

平成24年9月14日（金）に標記の協議会が長崎大学教育学部を会場に開催され、当センターからは長谷川と小川が参加した。下村勉会長および長崎大学片峰茂学長から挨拶のあと、事務連絡とセンター間で情報交換が行われた。午後には、文部科学省初等中等教育局企画官の日向信和氏より基調講演「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」が行われ、中央教育審議会の答申で求められている教員養成の修士レベル化について解説と質疑応答が行われた。その後、部門会議が行われ、部門別に協議が行われた。

第82回国立大学教育実践研究関連センター協議会

センター長 小川 亮

平成25年2月19日（火）に標記の協議会が東京学芸大学において開催された。当センターから小川が参加した。会長の挨拶のあと、文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室長の鍋島豊氏による講演があり、文科省が全国の実践センターに期待するものについて述べられた。主催校の東京学芸大学学長村松泰子氏からの挨拶のあと、予算報告など事務連絡が行われた。午後から、各センターからの報告と連絡があった。15時から、3つの部門別に会議が開かれ協議が行われた。

平成24年度日教大協北陸地区教育実践研究指導部門研究協議会

センター准教授 長谷川 春生

平成24年11月12日（月）、福井大学教育地域科学部附属教育実践総合センターにおいて標記の会が開催された。当センターからは、小川と長谷川が参加した。

次の3つのテーマについて協議を行った。

1. 中央教育審議会答申で示された教員養成修士レベル化に対する各大学の対応とセンターとしての関わり方
2. 中央教育審議会答申を受けての各大学・センター改組の方向性と役割について
3. センターによる地域連携の取組状況

3について、福井大学では、地域の中の福井大学であることを大切にしており、地域の小規模学校と連携した活動等を考えているとのことであった。上越教育大学では、戦略的な地域連携事業として、毎週水曜日にセンターで小中学校の教員を対象としたセミナーを行い、成果を挙げていることが報告された。

平成 24 年度の実践センターの主な行事

平成24年（2012）

4月11日	センター会議
4月18日	センター会議
4月26日	教育実習事前指導（他学部）
4月27日	教育実習事前指導（他学部）
5月16日	実践総合センター運営委員会
6月27日	教育実習事前指導（人間発達科学部）
7月 4日	教育実習事前指導（人間発達科学部）
7月11日	教育実習事前指導（人間発達科学部）
7月25日	センター会議
7月25日	前期内地留学生発表会
8月23日	教育実習事前指導（人間発達科学部）
8月25日	平成24年度スクールカウンセラー研究会
9月 5日	センター紀要編集委員会
9月14日	第81回国立大学教育実践研究関連センター協議会（長崎大）
9月25日	前期内地留学生最終発表会
10月 5日	第26回日本教育大学協会全国教育実習研究部門研究協議会（鹿児島大）
11月12日	日本教育大学協会北陸地区教育実践研究指導部門研究協議会（福井大）
11月14日	センター会議
11月24日	教育実習事後指導（人間発達科学部）
12月 1日	情報モラル講演会
12月26日	後期内地留学生発表会

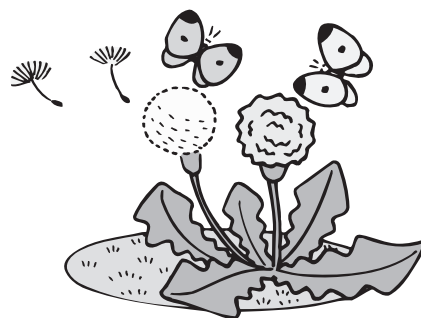
平成25年（2013）

1月31日	研究実践総合センター紀要教育実践研究第7号（通巻29号）発行
2月 6日	センター会議
2月11日	教育フォーラム2013「わかりやすい授業づくりのためのデジタル教科書活用」
2月16日	第17回発達と臨床の心理学講座
2月19日	第82回国立大学教育実践研究関連センター協議会（東京学芸大）
3月 7日	人間発達科学部教育実習運営協議会
3月13日	センター会議
3月21日	後期内地留学生最終発表会
3月25日	センターニュース発行

編集後記

今年も雪が多く、寒い冬だったと皆さんが話されます。昨年の今ごろ新潟市にいた私には比較することができないのですが、昨年の新潟市の冬よりも、今年の富山市の冬の方が雪も多く、寒かったと感じています。以前、雪が3mも積もる豪雪地の小学校に勤務していたことがあります。そのときの春が来たうれしさは、言葉ではうまく表せません。春が訪れたことを、雪が消えて姿を現した土のにおいて感じたときの気持ちは忘れられません。でも、3月に入り、青空の日が増えてくるとやっぱりうれしくて、ウキウキしてしまうのはやはり同じだとも感じています。

センターに着任して1年が過ぎようとしています。まだまだ仕事内容も十分に分からないような状態で申し訳なく思うのですが、教育委員会、地域の学校、附属学校、地域の方々とかかわっていくことの大切さを実感しています。また、そのようなかかわりのためにセンターが重要であることも分かってきました。センターの研究や業務で、学生への指導で、少しでもお役に立てるように、とにかくがんばっていきたいと思います。(長谷川 春生)



印刷 平成25年 3 月25日
発行 平成25年 3 月25日
編集発行 富山大学人間発達科学部
附属人間発達科学研究実践総合センター
代表者 小川 亮

〒930-8555 富山市五福 3 1 9 0
電話 0 7 6 - 4 4 5 - 6 3 8 0